

幸せのメカニズム—実践・幸福学入門（前野隆司、講談社現代新書、2013年）

文字数の都合で、泣く泣く本には載せられなかった原稿の紹介！

加藤せい子さん（岡山県総社市NPO法人吉備野工房ちみち代表）



<http://www.chimichi.org/>

以下、幻の原稿です。

地域活性化と幸せ創りの達人

圧倒的な魅力で周りの人を幸せにし続けている方を、ご紹介しましょう。加藤せい子さんです。

加藤せい子さんは、岡山県総社市で、NPO法人吉備野工房ちみちを主宰されています。加藤さんは、地域活性化と幸せ創りの達人です。ただ、自分について語る時に謙虚な方です。もっと、「私はすごい」と言ってもいいだけの実績をお持ちなのですが、「私はただのふつうの主婦」とおっしゃいます。

ちみちが行うプログラムは、今や人間中心の地域活性化活動として注目されています。加藤さんは、講演や「達人」を作るワークショップを行うために全国を飛び回り、海外へのノウハウ移転も行っておられます。

ユニークなのは、「一人一品」と名付けられた活動の理念。一人ひとりがその良さを生かす活動の呼び名で、達人一人ひとりを育成する段階と、達人が身に付けた知識や技をもとに人々に対して体験プログラム「みちくさ小道」を行う段階から成ります。

「どのように達人を育成するのか」という点が多様な「自己実現と成長」に関わっていて興味深いのですが、まずは、達人が行う体験プログラムは具体的にどんなものなのかを見てみましょう。

「達人」が行う体験プログラム「みちくさ小道」は、年に二度、それぞれ二ヶ月程度行われます。この中で、数時間から一日の様々な体験プログラムが実施されています。具体的には、「総社の古代古墳探訪」「小型の古墳を作ろう」「ピカピカの泥団子作り」「古民家で味わう食事と食の話」「韓国伝統お菓子とお茶体験」「備中神楽のお話と鑑賞」「岡山弁で歌わにゃおえまあー！」「時間がない人の時間管理術」などなど。もっとたくさんあります。

プログラムの中には、地域の伝統に即した文化的なものもあります。加藤さんが「吉備野」と名付けた吉備文化発祥の地、岡山県は、古墳で有名。大小さまざまな古墳があります。それを解説し見学するツアー。あるいは、八メートルくらいの小型古墳を作ってみる体験プログラム。また、他愛のなさそうな昔懐かしいものもあります。昔、ピカピカの泥団子、作りませんでしたか？ 私は、小学生の時に作った泥団子を今も大事に取ってあります。そんな子供の頃の技を、ほかの方に教える体験プログラム。岡山弁で歌うイベント。これは、テレビ番組にもなっているそうです。さらには、時間管理術など、都会のビジネス講座みたいなものもあります。つまり、一人一品。それぞれの人が自分の得意なことをひとつ見つけ、それを来訪者に見せたり演じたりすることで、自己実現と地域活性化を図る活動です。

「古墳好きの人は古墳について説明する。ピカピカの泥団子づくりでもいい。岡山弁で歌うのでもいいし、時間管理術の講習でもいい。経済的価値や文化的価値があろうとなかろうと、そんなことは関係ない。それぞれが、それぞれの良さを生かし、「自己実現と成長」を果たし、オタク・天才・達人になろう。」そんな活動です。

誰もが達人になる素質を生まれ持っている

では、加藤さんたちは、どのようにして達人を育成しているのでしょうか。

キーのひとつは、コーディネータといわれる人たち。体験プログラム「みちくさ小道」のイベントが始まる、その一年から数年くらい前から、じっくりと時間をかけて達人の育成が着々に行われます。加藤さんは「育成ではない。コーディネータの人たちは、その人の話をしっかり聴き、人のもつ強さを自然に引き出していくだけ。だれでも達人になる資質を生まれ持っている」と言われます。

吉備野工房ちみちのコーディネータはほとんどが女性。カウンセリングの資格を持っている方もおられ、達人候補者から、時間をかけて得意なことややりたいことを聴き出していきます。ポイントは、①話をよく聞く、②受け入れる、③一緒に作っていく、の三点。

加藤さんがおっしゃるには「実は、小学校低学年の頃の思いが大事」だそうです。「そのころやりたかったけれどもできなかったこと、つらかった思い出、逆に得意だったこと。社会に出始めた小さな子供の頃の思いを人はずっとひきずっている。長い間、忘れ

て生きてきたけれども、心の奥底に眠っている、それぞれの思い。懐かしい、心ができたばかりの頃の思い。そんな非日常の思いを引き出してあげると、人はものすごく元気になる。それを、引き出しているだけ。」そうおっしゃいます。ここに加藤さん流の達人育成の極意があるように思います。

そもそも、加藤さんがこの取り組みをされたきっかけは、「子育てが終わり、働こうと思ったら、仕事がない。こんな社会っておかしいのではないか。誰にでも活躍する場があっていいのではないか。」という疑問だったそうです。

だれにでも、達人になる素質があるはず。だから、「一人一品」では、個人の特性にフォーカスし、それを形にしていくのです。

育成された「達人」は、様々な体験プログラムを実践します。体験プログラムを主催し、運営することで、「達人」は、より「達人」らしく進化します。体験プログラムは、モチベーションを上げる場、経験を積み重ねる場、ネットワークを作って行く場、まだ見ぬ新しい自分に気づく場なのです。それらに気が付くことは、さらなる新しい挑戦につながります。地域との距離もより近づく。社会をよくする方向へ、気持が向いていくのです。

いかがですか。まさに、誰もが幸せになっていく好循環ループが形成されていると思いませんか。

達人は、自分のできることで「自己実現と成長」を果たす。コーディネータは、人々の良さを引き出し、達人への道を手伝うことで、「自己実現と成長」を果たす。そして、この連携活動はまさに「つながりと感謝」から成り立っています。みなさん、元気いっぱい「まえむきと楽観」にあふれています。もちろん、人の目を気にせず独自の一人一品に挑むこと自体が「独立とマイペース」です。まさに、幸せの四因子を満たす活動です。しかも、郷土愛が醸成されるとともに、多様な人々のつながりもがっちり強化できますから、地域の活性化と、いざという時の地域の強さも育んでいます。冒頭に、加藤さんは、地域活性化と幸せ創りの達人、と述べた理由がここにあります。加藤さんに言わせると「地域活性化ではなく、人々の品（品位。その人だけが持っている良さ）を引き出し、それぞれを主役にする活動だと考えている（だから一人一品）。結果として地域が活性化している。」とおっしゃいます。

私は、加藤さんたちをお願いして、「みちくさ小道」実施前後の達人とコーディネータの方に、ディーナーの人生満足尺度と感情的幸福を測らせていただきました。その結果、日本人千五百人の結果と比較して、圧倒的に幸福度が高い結果が得られました。予想通りです。彼女らの活動は、人々を幸せにする、人間中心地域活性化活動だったのです。

これまで五年間のコーディネータ数は三十名弱、達人はなんと四百人以上。こんなに

たくさんの方の幸福を、一人ひとり、オーダーメイドでつくられているのです。

加藤さんご自身も、四因子を満たしておられます。本人は、「自分は天才でも達人でもない。人の目は気にする。普通の主婦で取り柄がない」とおっしゃいます。「まだまだ、やるべきことがたくさんある」と。自然体で謙虚。しかし、エネルギーでパワフルです。たくさんの方が、加藤さんを慕って集まっています。ご本人はそんなことはないとおっしゃいますが、私から見るとまさに「人を幸せにすることの天才・達人」です。

加藤さんは、「全国どこの誰でも達人になれる」とおっしゃいます。実際、同様な活動を国内外十カ所近い地域で指導しておられ、それぞれの地域で達人の輪を広げておられます。まさに幸せづくりの達人ですね。皆さんも、こんなやり方で自分の中のオタク・天才・達人を探し出したいと思いませんか。

(前野隆司)